
? ?

独桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

？

？

【Nコード】

N3403Z

【作者名】

独桜

【あらすじ】

不幸なこと、幸せなこと、それは人がどう感じるかによる。でも、

誰から見ても不幸なことは、良くあることだけれど、

誰から見ても幸せな瞬間は、あまり存在しません。

不幸なのは幸せが回ってくる順番待ちの期間、だけど、自分だけの力じゃどうにもできない不幸に絶望する少女：「桜雷」

幸せにめぐり合う瞬間は、もうオレにはやってこないと嘘で心を塗り固めた少年：「龍」

二人が出会ってから、本当の幸せのストーリー！。

? ? (前書き)

運命によってめぐり合った二人の男女のハッピーエンドまでの物語。
今回は『出会い』

幸せか、不幸せか、今のあなたはどちらなのか。

あなたを見て幸せそうだと思う人も、不幸せそうだと思う人もいる
と思います。

でも、そのどちらなのか、それはあなたが判断することでしょう？
人の意見に惑わされないで、自分の意思を持って考えてみれば、答
は出るかもしれせん。

? ?

神の子。

主に、仏教徒の日本。

現代日本にも、神の生まれ変わりと呼ばれる力は、存在する。この小説は、そんな神の生まれ変わりの、子供たちの話です。

あおたに さくら
青谷桜雷、高校2年。

彼女の周りにいる人は、とても幸せでした。

かわりに桜雷は不幸でした。

不幸だということがコンプレックスで、まわりから嫌われ続けました。

仲間はいませんでした。両親は幼くして他界し、兄弟もいませんでした。

うしろ ねり
倉敷龍高校2年。

彼の周りにいる人は、とても幸せでした。

かわりに、彼は不幸でした。

不幸だという事を周りに悟らせずに生きてきたので、彼はまた幸せだったのかもしれない。

彼には両親も、兄弟もいませんでしたが、それもまた、嘘で塗りたくって生きてきました。

ある日、その二人が出会ったときから始まった物語。

「龍、今何時？」

「え？ああ。えっと、4時半くらいだよ。」

龍と彼の友達、

野々宮燐は、駅前で話をしていました。

「うっわ、やっべえ！もうすぐアニメ始まるじゃん！じゃ、悪いけ

ど！」

隣はすばやくその場を去っていきました。

龍は、家に帰っても帰らなくても、家族は心配しないので帰らないことにしました。

でも、義理母にすっかりと、メールをして。

「はぁ・・・」

小さくついたため息は、白く儂く、空気として霧散していきました。

「・・・うつ・・・」

自分の吐いた息が、空気となり、街を行き交う人たちの肺に吸い込まれていく。

また、自分の肺にも他人の息は入り込んでいる。

考えただけで彼は、吐き気を催し、また、

ぶらぶらと街を歩き始めました。

ファミレス（我が家）へと帰るまでに、時間を掛けるように。

「・・・あ」

もう4時半じゃない。

帰らなきゃ。

桜雷は、暗くなった公園のベンチに腰掛け、本を読んでいた。

心の中で、そつと自問自答してみる。

どこに？

どこでもないけど。

桜雷は、義理母に見放されていた。

勉強もできない、運動もできない。

高校に受かったのはただの奇跡。

性格も悪いし、不幸だし。

何のとりえもない私を、見放すのは当然だ。

それに

今まで面倒を見ていてくれたのだって、奇跡だ。

まあ、寝床とご飯だけくれただけでも、幸せだったんだろう。

愛

愛か。

私には、いつやってくるんだろう。

順番はいつ、くるんだろう。

いつか、いつか。

もう、この年齢でいえることは一つしかないだろう。

先に待っているのは、不幸だけだと。

いつか？いつかって、いつよ。

待ったじゃない。

散々、待ったじゃないの。

裏切られて

裏切られて

裏切られて

裏切られて

裏切られて

裏切られて。

それでも生きてきた。

生きてきたんだ。

私は、『運命になんか負けない』と。

何かのアニメで、聞いたセリフ。

母と一緒に笑いあって見たアニメ。

最終回で、だめだめな主人公が言った言葉。

心に響いたあの言葉。

母の言葉のように、温かくて心地よく、心強い。

あの言葉に支えられて今、私は生きている。

どこへ行くこうか。

今日は、どこのジャズ喫茶に行くこう。

一昨日行ったあの喫茶店に、もう一度行くこうかな。

そしてまた、ぶらぶらと冬の夜の街に歩き出していった。

オレは、なんで不幸なんだろう。よりによって、雨まで降ってきた。

周りに咲きはじめた傘の群れ。

どうしようもなく、ジャズ喫茶に立ち寄って雨宿りをした。

そこにいた、暗い雰囲気少女。

少女、というより、大人びていて、同い年くらいだった。

でも、雨に濡れて、黒く艶めくツインテールの彼女は子猫のようだった。

寒くて、愛に飢えて、心を震わせる捨て猫のように。

ふいに、彼女と目が合った気がした。

いや、目は合っていないかもしれない。

彼女はずっと下を向き、目を瞑っているのだから。

寝ているのかとも思った。

でも、たまに彼女のする、目をこするようなくさを見ると、心が安らいだ。

すると、今度は本当に目が合った。

「……？」

何でしょうか、とでも言いたげに目を向ける彼女は、愛らしかった。

「え、あ、あの……寒くないですか？」

「……えっと……大丈夫っくしゅ！」

「寒い……ですよね」

マスターに声を掛け、暖房を少しだけ強くしてもらった。

ハンカチを差し出したかった。でも、そんなもの今持っているはずもなく。

「あの……これ、使ってください。あつたまるまで時間かかりそうなので。」

羽織っていたダッフルコートを肩に掛けてあげた。

「あ、ありがとう、ございま、つくしゅん！」

かわいい……

え！？

「え……!？」

え!？」

ん!？」

「……？」

気がついたら、少し声が出ていて、彼女は不思議そうにこちらを見つめていた。

偽りのない、澄んだ瞳に吸い込まれそうだった。

幼さを残す彼女の輪郭、

かわいらしい両耳には不釣り合いな、いくつものピアス穴

きゅっ、と自身を抱くようにしてまわされた腕についた、細いいく

つもの傷跡

隠すこともなく、これが自分だと見せ付けるように感じられて心が痛んだ。

オレは、生き方さえも全てが嘘だった。

笑顔だって、嘘。

性格も嘘。

何もかも、嘘だらけ。

嘘で塗りつぶされていて、隠し通されていて。

生きることに、疲れを感じていて、

ピアスを開けたりしてみた。

リスカもなんとなくやっていた。

ただど生きている限り何も変わることはなくて。

通り魔や爆破テロ犯に、いつそのこと殺してほしかった。

目は濁りきっていて、もう何も悟ることはできない。

と、思っていた。

「……気分、悪そうですね。」

「……え」

「大丈夫ですよ。私でさえ、今まで生きてこれたんですから、あなただって。」

「……何かあったんですか？」

「いえ、あの、話しても面白いことのあるような人生じゃなかったんですよ。」

「・・・オレもですよ。両親に、先立たれてしまっただけからもう・・・」

「っ!」

「?」

「あ、あの、私も、両親に、った、他界されていたもので、ちょっと・・・」

「ぐうぜんですかね。」

「そ、そうですね。」

「いやいや。奇跡か運命だろうね。」

「!?!」

突然聞こえてきた、彼女とオレ以外の声に驚き、後ろを振り返るとマスターがいた。

「そ、そうなんですかね・・・?」

「・・・わかんないです」

「ここ、下宿とかやってるけど、泊まって行ったら?」

「え?どうしてですか?」

「家ないんでしょう?ファミレス?外、なんか雪降ってきたみたいだから。」

「え・・・」

これからファミレスを探すのは辛かった。

やっと体が温まってきたのに。

だから、マスターの言葉に甘えて、俺と彼女は一晩中話をした。

分かり合えた。

心が安らいだ。

不安がなかった。

それに、

癒された。

幸せだった。

二人は、生まれてから数年ぶりに。

幸せを感じたのだった。

?
? (後書き)

ありがとうございました。

次回は、桜雷の母親との思い出など、二人の語り合いの内容を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3403z/>

? ?

2011年12月11日18時47分発行